

<p>第192回 都市懇サロン レポート</p>	<p>『新たなステージに対応した防災・減災のあり方について』</p>		
<p>講師</p>	<p>国土交通省水管理・国土保全局 防災課 大規模地震対策推進室長 藤兼 雅和氏</p>	<p>開催日</p>	<p>平成27年6月30日(火) 18:00~20:00</p>
<p>講師 プロフィール</p>	<p>平成3年 建設省(当時)入省 (土木研究所水門研究室研究員) 平成9年 在イラン大使館二等書記官 平成19年 国土交通省関東地方整備局 甲府河川国道工事事務所長 平成24年 愛知県建設部河川課主幹 平成27年4月から現職 技術士(河川、砂防及び海岸、海洋) 気象予報士</p>	 <p>当日のサロンの様子</p>	
<p>お話の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時間雨量が50mmを上回る豪雨が全国的に増加しているなど、近年、雨の降り方が局地化・集中化・激甚化している。また、平成26年8月広島で起きたバックビルディング現象による大規模土砂災害や、フィリピンへのスーパー台風の襲来、大規模な火山噴火等の発生のおそれなどが起きている。そうしたことから、既に明らかに雨の降り方が変化していること等を「新たなステージ」と捉え、防災・減災のあり方について説明をいただいた。</li> <li>・ これまで洪水は、地震や津波等の対策に比べて最悪の事態の想定(1000年に一度の対策)をされていなかった。そのため、最悪の事態も想定して、個人、企業、地方公共団体、国等が主体的に、かつ、連携して対応することが必要として今後の検討の方向性について検討がなされている。</li> <li>・ 事例として、昨年10月に台風19号が大阪に上陸するため、JRの電車の休止やUSJの16時の閉園、野球開催中止等の自主的行動として、タイムラインに沿った台風への対策など、ハードでの解決以外の対策が見られた。こういった主体的かつ、連携して対応する体制などが望まれているとした。</li> </ul>		
<p>意見交換の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 気候変動の対応として、どのように考えていくのか。最悪の事態を超えてくることもあるのではないかと。</li> <li>⇒他の国においても、気候変動について止められない。緩和策として捉えていく。</li> <li>・ 最悪な事態を想定するなど、様々な検討が国でなされているとのことだが、実際に主体的に連携して対応していくためには、多くの方にじわりじわりと伝えていくことが大切ではないか。東日本大震災も経験し、現状では、最悪のシナリオを想定した内容についても理解が得られるのではないかと。</li> <li>・ 具体的な話として、身近な取組として自治会があるが、その中で近所にどんな方が住んでいるのか、個人情報の関係で分からないなど、市民が協力して対応していくには、様々な課題がある。そういった事も考えていかなければいけない。</li> </ul>		
<p>記録者の ひとこと</p>	<p>・新たなステージとして洪水への最悪の事態を想定し、様々なお話しをいただいた。多くの自治体がコンパクトシティの実現を目指し検討がなされているが、気候変動による対策も具体的に考えていく必要があると感じた。</p> <p>《都市懇サロン運営部会 委員 島津 雅充》</p>		